

## 熊野信仰をめぐる女人蘇生譚

はじめに

熊野（和歌山県と三重県にまたがる紀伊半島南端部）とは、海山、川そして巨石といった自然を対象として発生した信仰圏すなわち聖地である。現在は、熊野三山と総称される三社（熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社）を拠点とする信仰スポットであると認識されているが、そもそもは、社殿を持たない信仰圏であった可能性が高い。『日本霊異記』ほか、山林修行者たちの行場であったことを伝える文献も少なくなく、その信仰の実態と性格をも推察させる。ただし熊野三山が、一種の宗教的連合体を形成していたことを文献に辿れば『為房卿記』を挙げることができる。平安時代後期以降、たびたび行われた熊野御幸は熊野三山に参詣することを目的としていたと確認

されるわけである。そして熊野という聖地は、為政者たちに信仰されただけでなく、日本各地に「熊野神社」と称される神社が勧請されたほか、民衆からも信仰を集めるようになる。室町時代には「蟻の熊野詣」と表現されたように、数多くの人々が参詣に訪れていたことが確認できるのである。

そして、熊野信仰を唱導するために、漢文体で表記された縁起だけでなく、仮名を交えて表記されたモノガタリが形成されていく。なかでも熊野信仰の縁起を語る『熊野の本地』は室町時代物語の一つとして現在位置づけられているように、奇想天外なストーリーをもって語られている。

小川路世

一 熊野をめぐる母と子のモノガタリ

熊野信仰の縁起を語る『熊野の本地』の原拠・現存諸本については、松本隆信氏の研究が知られる。松本隆信氏が指摘されたように、<sup>(1)</sup>『神道集』<sup>(2)</sup>に収載される「熊野権現事」や「熊野の本地」に語られる「五衰殿女御譚」はその類似性から『施陀越国王経』<sup>(3)</sup>が原拠であると考えられている。

また、現存諸本については次のように指摘されている。<sup>(4)</sup>

室町時代後期から桃山時代頃の絵巻・奈良絵本をはじめ写本が非常に多く、版本にも寛永頃の丹緑本・寛永八年版・元禄頃の井筒屋版等がある。本文も諸本の間で複雑な異同を示しているが、中で、杭全神社蔵室町末期絵巻・天理図書館蔵元和八年絵巻・丹緑本以下の版本系では、終りに五衰殿女御が聖の修法によつて蘇生することを述べるのが特徴的である。

つまり、『熊野の本地』と題されるテキストには、モノガタリの展開に関わる相違点として、「五衰殿女御が蘇生せず、その息子である王子に供養される」という内容で語られるテキストと、「五衰殿女御が蘇生して、王子や善財王、彼らを導く僧侶とともに熊野に飛び、垂迹する」という内容を語るテキスト

を指摘することとなる。

それではなぜ、『熊野の本地』に五衰殿女御の蘇生を語らないモノガタリと、蘇生を語るモノガタリが形成されたのだろうか。それは、『熊野の本地』によつてその信仰の功德が語られる熊野信仰が、仏教を受け入れたことによると考えられる。熊野信仰が仏教を受け入れていたことは、白河院政期の参議藤原為房の日記である『為房卿記』に確認できる。<sup>(5)</sup>

次奉供幡・花鬘代於三所之御殿

永保元年（一〇八一年）に熊野三所の御殿に、仏前の荘嚴具である幡と花鬘代を供奉した、という記述があることから、遅くとも十一世紀末ごろには、熊野三山の祭神に本地を当てる信仰態が形成されていたと考えられる。また、権中納言源師時の日記である『長秋記』長承三年（一一三四年）二月一日の鳥羽院待賢門院熊野御幸の条には、熊野三所と五所王子の祭神とその姿、本地仏についての記録が残されている。<sup>(6)</sup>

問護明本地、

丞相、和命家津王子、法形、阿弥陀仏、

両所、西宮結宮、女形、本地千手観世音菩薩

中宮、早玉明神、俗形、本地薬師如来

已上三所、

若宮、女形、本地十一面、

禅師宮、俗形、本地地藏菩薩、

聖宮、法形、本地龍樹菩薩、

児宮、本地如意輪観世音菩薩、

子守、本地聖観世音菩薩、

已上五所王子、

一万、普賢、十万、文殊、

勧請十五所、釈迦、

飛行薬叉、不動尊、米持金童子

毘沙門天、礼殿守護金剛童子、、、他、

この記録から、熊野における本地垂迹の形態は、平安時代後期には概ね成立していたと考えられ、仏教を受け入れていたことが確認できるのである。

加えて、『熊野の本地』には、法華経信仰の功德が語られていることを確認できる。さらにいえば、『熊野の本地』に確認できる、五衰殿女御の蘇生を語る系統の『熊野の本』が、『法

華経』信仰の功德を語るモノガタリと同様の構成を有していることを指摘できるのである。<sup>(?)</sup>

『熊野の本地』諸本は、「五衰殿女御が蘇生せず、その息子である王子に供養される」という内容で語られるテキストと、「五衰殿女御が蘇生して、王子や善財王、彼らを導く僧侶とともに熊野に飛び、垂迹する」という内容を語るテキストが存在する。また、『熊野の本地』の原拠であると指摘される『旃陀越国王経』さらには『熊野の本地』と同様のモノガタリを語る『神道集』に収載される「熊野権現事」には、五衰殿女御の蘇生は語られていないのである。次に掲げるのは、『旃陀越国王経』、『神道集』に収載される「熊野権現事」、『熊野の本地』の三話に語られる五衰殿女御譚について比較対照したものである。

	懐妊	出産と死	蘇生	垂迹	※
『旃陀越国王経』	○	○	×	×	王も王子も垂迹しない
『神道集』	○	○	×	○	王と王子、上人ともに垂迹
『熊野権現事』	○	○	×	○	王と王子、上人ともに垂迹
『熊野の本地』 (蘇生しない)	○	○	×	○	王と王子、上人ともに垂迹
『熊野の本地』 (蘇生する)	○	○	○	○	王と王子、上人ともに垂迹

つまり、「熊野の本地」に語られる「五衰殿女御譚」には、原拠とされる『旃陀越国王経』や『神道集』に収載される「熊野権現事」には確認されない、五衰殿女御が息子である王子に供養された功德によって蘇生する姿が描かれているのである。

この点が「熊野の本地」の特色であるということが出来る。『熊野の本地』は、原拠であるとされる『旃陀越国王経』や『神道集』に収載される「熊野権現事」には語られていない「子に救済される母親」という要素が付け加えられているのである。熊野信仰の縁起を語るモノガタリとしては、『神道集』に収載される「熊野権現事」、五衰殿女御の蘇生を語らない系統の『熊野の本地』の時点では女性が救済の対象として描かれておらず、五衰殿女御の蘇生を語る系統の『熊野の本地』においてようやく女性が救済されるモノガタリが語られるのである。

それに加えて、五衰殿女御は蘇生後に大王や王子らと共に熊野の地に神として飛来することが語られるが、この五衰殿女御の辿った「人間から神になる」というモノガタリは、『法華経』利益譚と同様のプロットであることが指摘できる。五衰殿女御は生前に観世音菩薩を信仰し、仏道修行を行ったことに加えて、息子である王子によって供養されるといふ功德を積んでいた。その結果として、人間道から天道へと転生したことが語られる

のである。つまり、熊野信仰は「熊野の本地」を『法華経』利益譚として語ることで、仏教を「救済する宗教」として受け入れ、女性を受け入れる信仰地として民衆に印象付けようとしたことが推考できるのである。

## 二 「熊野の本地」と観世音菩薩信仰

『熊野の本地』における「五衰殿女御」のモノガタリは、原拠である『旃陀越国王経』、さらには『神道集』に収載される「熊野権現事」と比較しても、観世音菩薩信仰の利益が詳細に語られていることが指摘できる。<sup>(8)</sup>『熊野の本地』では、「五衰殿女御」が善財王の寵愛を受けた後、山中に連れられ殺害されるまでの間に、観世音菩薩信仰の功德によって利益を得るといふ場面が語られる。そこでまず、『神道集』に収載される「熊野権現事」において観世音菩薩信仰の功德を語る場面に<sup>(9)</sup>ついて確認しておく。観世音菩薩信仰の功德による利益譚を語る場面は以下の三場面である。

一、五衰殿女御が仏の容姿を得る

千手三尺ノ千手観世音菩薩ヲ迎ヘ奉リ祈ケレハ、観世音菩薩

ノ利生は今ヲ始メヌ事ナレハ、后は生ヲハ替カヘ給ワネ共、此の身ナカラ  
三十二相八十種好具足シ、紫磨金色ノ身ト成玉ヘリ、自ヨリ  
身光ヲ出シ照シ給、見ニ宮ノ内モ耀、光明赫奕ナリ、仏ノ示処ナレハ、  
大王ハ偏ニ此ノ宮ヘ御志シ在テマ、行幸成ニケリ、

二、王子を懐妊する

而レ未タ王子ノ一人御在サヌ事マ、大王ハ嘆セ給テ、王子を佛に  
申サセ給ケリ、于(レ)時驗シ有ヲ、善法女御ハ懐妊シ給ヘリ、

三、観世音菩薩に祈願して首を斬られる前に王子が生まれる

而る程に后は千手経ヲ読シ給テ、後ハ、御産の色見ニケリ、一時計リ  
有テ生レ給ヘリ、五月ニ成給ケレ共、六根五体欠ル事モ無ク、明玉ノ  
如ク王子ニテソ御在ケル

一方、『熊野の本地』に語られる観世音菩薩信仰の利益譚は  
次の五場面である。<sup>10)</sup>

一、五衰殿女御の容姿の変化による善財王の訪れと懐妊

これを悲しみ給ひて、宮中に持仏堂を建て、本尊に十一面  
観世音菩薩を御安置ありて、日夜に御経三十三卷、礼拝  
三千三百三十三度し給ひて、「大王、今一度宮中へ御幸な  
らせ給へ」と肝胆を碎き御祈念ありければ、誠に観世音の

御憐れみにやありけん、残り九百九十九人の后よりも御容  
厳くしく見えさせ給へば、大王五衰殿に移らせ給ふ。

さて五衰殿、年月の御願ひ叶はせ給ひ、御心地常なら  
ずして乳母を近付け、かくと仰せありければ、乳母斜めな  
らず喜び申しけるは、「千人の后のうち、一人秀でさせ給ひ、  
王子御懐胎めでたさよ」とて、

二、九百九十九人の后達の呪詛は、五衰殿女御の観世音菩薩信  
仰の功德によつて退けられること

后たち聞こし召し、「王子を七日七夜呪詛せしが、如何あ  
るべきぞ」と問はせ給ふ。「愚かの仰せや。百日の間、法  
華経・観世音菩薩経怠ることなく読ませ、その信得にて出  
で来させ給ふ王子なれば、いかばかり呪詛し給ふとも叶ふ  
べからず。かの御経にも『還著於本人』と説かれて候へば、  
后たちの御身の上こそ危ふく覚えて候ふ」と申しければ、  
「かかることかねて知りなば、誰かは観世音菩薩を信ぜざ  
るべき。空しく送りし年月かな」と口説き歎き給ふ。

三、馬が観世音菩薩の化身であること

后泣く泣く宣ふやう、「馬はこれ馬頭観世音菩薩の化身

されば観世音菩薩は三十三遍に身を現じ、衆生の苦を救ひ給ふ。我八歳の春の頃より、怠らず念じ奉りしその信徳朽ちもせて、この恐ろしき道すがら馬と現じ給ひて我を助け給ふらんありがたさよ、我生を變へ仏へとならば、汝が恩を深く報ずべし。神とならば一つの御先と祝ふべし」と、この馬に口説かせ給ふことこそあはれなれ。

四、王子が生まれるまで刀で首が斬れないこと

その後、「胎内に王子ましまさんほど、いかに斬るとも首は斬れまじき」と仰せあり。腹の内に入ります王子に口説き給ふやう、「自ら首斬られて後、いかにして生まれさせ給ふべき。疾く誕生あれ」と仰せければ、則ち生まれさせ給ふ。

五、五衰殿女御の祈願によって獸たちが王子を護ること

「三歳の間守らせ給ひ、王子育て給べ」と御祈りあり。「同じくは心なき獸も子をば愛しむ習ひなれば、誰も憐れと思ひ、王子を守護し奉れ」とありければ、誠に心なき畜類ども頭をうなだれ、涙を流し、夜昼番替はりに仕え申す。梢に登りては木の実を採り、谷に下り水を掬ひ、五衰殿の御

死骸を守り奉り、王子を育て参らせけることこそ不思議なれ。

以上、観世音菩薩信仰を読み解ける箇所について、『熊野の本地』と、『神道集』に収載される「熊野権現事」、『施陀越国王経』を加えて比較すると、次のような表となる。

	容姿の変化	懐妊	呪詛	馬	刀	獸
『施陀越国王経』	×	×	×	×	×	×
『神道集』		○(仏の姿になる)	○	×	×	×
『熊野権現事』		○(姿が美しくなる)	○	×	×	×
『熊野の本地』		○(姿が美しくなる)	○	○	○	○

まず、観世音菩薩信仰による利益譚は『施陀越国王経』には説かれていない。また、『神道集』に収載される「熊野権現事」にも、観世音菩薩信仰の功德によって容姿が変化したこと大の寵愛を受け王子を授かることが語られているのみで、『熊野の本地』に語られているような、呪詛を退ける、刀杖難を退けるといった観世音菩薩信仰の利益譚は語られていないことが

確認できる。以上から、『熊野の本地』は、『旃陀越国王経』と『神道集』に収載される「熊野権現事」よりも、観世音菩薩信仰による利益譚が豊かに語られていることが確認できる。

熊野の本地』には、『旃陀越国王経』と『神道集』に収載される「熊野権現事」よりも観世音菩薩信仰による利益譚が豊かであることが確認できた。それに加えて『熊野の本地』においては観世音菩薩信仰の利益譚が『法華経』に基づいて語られていることが指摘できるのである。なぜなら、『熊野の本地』に語られる観世音菩薩信仰の利益譚は『法華経』「卷八第二十五 観世音菩薩普門品」の経文に基づいていることが確認できるためである。

前述の『熊野の本地』に説かれる観世音菩薩信仰の利益譚を語る五場面のうち、二、三、四、五の場面において「観世音菩薩普門品」に説かれる観世音菩薩信仰の利益譚と同様の内容を語ることが確認できた。その詳細については以下の通りである。

二、九百九十九人の后達の呪詛は五衰殿女御の観世音菩薩信仰によって退けられる

呪詛諸毒薬 所欲害身者

念彼観世音菩薩力 還著於本人

三、馬が観世音菩薩の化身であること

善男子。若有国土衆生应以仏身得度者。観世音菩薩。即現仏身而為説法。

四、王子が生まれるまで刀で首が斬れないこと

若復有人。臨当被害。称観世音菩薩名者。彼所執刀杖。尋段段壊。

五、五衰殿女御の祈願によって獣たちが王子を護ること

若悪獸圍遶 利牙爪可怖  
念彼観世音菩薩力 疾走無辺方

つまり、『神道集』に収載される「熊野権現事」には語られておらず、『熊野の本地』にのみ確認される観世音菩薩信仰の利益譚が『法華経』「卷八第二十五 観世音菩薩普門品」に基づいて語られていることが指摘できるのである。

また、『法華経』は、「卷五第十二 提婆達多品」に代表されるように、女性の身体のままでの成仏こそ説かないが、変成男子による女性の成仏を説くなど女性の仏教信仰に寄与した経典

であった。「熊野の本地」が『法華経』「卷八第二十五 観世音菩薩普門品」に基づいた観世音菩薩信仰による利益譚を語ったことは、女性からの信仰を集める上で大きな役割を担っていたと考えられる。

以上から、「熊野の本地」における「五衰殿女御譚」においても、『法華経』信仰の功德による蘇生譚に確認できるモノガタリの展開と同様の展開を確認することができる。五衰殿女御は生前に仏教を信仰していたが、懷妊を妬んだ九百九十九人の后らによって殺害されるという不本意な死を遂げる。その後王子によって供養され、蘇生を経て熊野に垂迹するのである。そこに、「五衰殿女御」が蘇生するというモノガタリは、『法華経』信仰の功德を語るモノガタリとして形成されるために必要であり、『神道集』に収載される「熊野権現事」には語られていなかったものの、「熊野の本地」の形成において付け加えられた可能性が高いと指摘することができる。

つまり、「熊野の本地」と類似するモノガタリを語る『神道集』に収載される「熊野権現事」においては『法華経』「卷八第二十五 観世音菩薩普門品」に基づかない観世音菩薩信仰の利益を語るのみであった。しかし、『熊野の本地』に加えられた改編の過程において、『法華経』「卷八第二十五 観世音菩薩

普門品」に基づく観世音菩薩信仰の利益譚、そして『法華経』信仰の利益譚において語られる「死者の蘇生」という展開が加えられたことよって、『法華経』信仰による利益を色濃く語るモノガタリへと変化していったのである。つまり、『熊野の本地』は観世音菩薩信仰の功德による利益譚を語るに加えて、『法華経』「卷八第二十五 観世音菩薩普門品」信仰の功德を語る、言い換えると、『法華経』信仰の功德を併せて語るモノガタリであったと読み解けるのである。

#### まとめ

熊野信仰の功德を唱導するモノガタリとして「出産によって命を落とした女性の蘇生」が語られるに至る経緯を明らかにすることを試みた。「熊野の本地」には、特に観世音菩薩信仰の功德が多く語られていることが確認できる。「熊野の本地」と同様のモノガタリを語る『神道集』に収載される「熊野権現事」では、観世音菩薩信仰の功德が語られるのみで、五衰殿女御が蘇生するという『法華経』信仰の功德による蘇生譚の構成を持たない。つまり、「熊野の本地」が形成されるに至って、『法華



経」信仰の功德を語るモノガタリとして変化していったことが確認できるのである。

熊野で唱導されるべき縁起は、本来ならば、王子が神として垂迹するモノガタリであり、その関係者ともに勧請されていることを語れば良かったはずではないだろうか。しかし、王子の母、つまり女性である五衰殿女御が神として垂迹し、熊野に勧請されたモノガタリを加えることによって、熊野は「女性たちの信仰の場」として印象付けられていったものと考えられる。熊野の縁起として語られた『熊野の本地』に、「五衰殿女御のモノガタリ」が加えられた背景には、実際に、熊野に展開したであろう信仰世界が存在したものと考えられるのである。

また、王子を出産した後には、観世音菩薩信仰の功德によって「五衰殿女御」の首が切れずに、命を落とすことなく王子を育てるというストーリー展開も十分に考えられるはずである。なぜ、そのような展開を持たなかったのか。それは、「五衰殿女御」の願いは、自分が助かることではなく、自分の命に代えても王子の命を守ることであったためである。そして、母親としての「五衰殿女御」の姿を描くことで、女性の共感を呼び起こそうとしたのではないだろうか。熊野という信仰の場において、女性が救われる縁起を唱導することは、重要な意義を持っていたと考えられる。

熊野権現といえは、その信仰を全国に広め歩いた熊野比丘尼と呼ばれる女性宗教者の存在が知られている。熊野比丘尼たちは中世から近世にかけて活躍し、『那智参詣曼荼羅』や『熊野観心十界曼荼羅』を主に女性たちに絵解きして布教・勧進活動に従事していたが、この『熊野の本地』も絵解きの台本として用いられていたことが指摘されている。熊野比丘尼の語りを通して、女主人公五衰殿の苦悩は女性たちの共感を呼んだことである。「五衰殿」とも呼ばれるこの物語は、苦しむ神を描く本地物の代表であるが、苦しむ女性であり母である「五衰殿女御」が救われるというモノガタリが語られたことは、女性が信仰する場として熊野という聖地を印象付けるものであったと考えられる。

〔注〕

- (1) 松本隆信「熊野の本地」考序説（『民衆宗教史叢書』）
- 二一 熊野信仰 編集 宮家準、出版 雄山閣出版株式会社、一九九〇年）「熊野の本地」（『日本古典文学大辞典』岩波書店）「中世における本地物の研究（四）——本地物の成立と北野天神縁起——」（『斯道文庫論集十四』、発行 慶應義塾大学 斯道文庫、一九七七年十二月）

(2) 『神道集』については『国史大辞典』に次のように記されている。

「神道集」とはその内容は寺社に属して民衆に寺社の縁起を語っていたらしい巫祝の徒の管理していた、物語的な口承文芸の要素を持つ神々の縁起譚が多く含まれる。五十章に分けて十卷十冊の内容となっており、内題に安居院作と記され、唱導の家として『元亨釈書』にみえる天台宗の安居院澄憲の子孫が編者であったかと思われる。文中に「今年」として「文和三年（一三五四）」および「延文三年（一三五八）」をあげてあり、南北朝時代中期には成立していた。各章は神道論的なものと垂迹縁起的なものに大別される。（『国史大辞典』「神道集」、吉川弘文館 より）

(3) 『大正新脩大藏經 第十四卷』「旃陀越国王経」（編集

高楠順次郎、発行 大正一切経刊行会、一九二五年一月二十日）

(4) 「熊野の本地」『日本古典文学辞典』（出版 岩波書店、一九八四年一月二十日）

(5) 『神道大系 文学編5 参詣記』（編集者 神道大系編纂会、校注者 新城常三、発行 神道大系編纂会、一九八四年

三月十五日）

(6) 『増補 史料大成 長秋記二』（編纂者 増補「史料大成」刊行会、発行 臨川書店、一九六五年九月）

(7) この点については「熊野信仰における「五衰殿女御譚」の形成」（『国文学』一〇一号、発行 関西大学国文学会、二〇一七年三月）にて詳細に述べた。

(8) なお、この「五衰殿女御」が観世音菩薩信仰の功德により利益を得ることについて、中野真麻理氏が指摘されている。（中野真麻理氏「熊野の本地」私注（『成城国文学』九、発行 成城国文学会、一九九三年三月）また、「馬が観世音菩薩の化身である」という認識については、櫻井陽子氏も「観世音菩薩普門品第二十五」の海難譚の解釈として、観世音菩薩が馬となって衆生を救済するという認識が中世にあったと指摘されている。（『延慶本平家物語考証』（編者 水原一、発行所 新興社、一九九二年五月三〇日）

(9) 『神道集』に収載される「熊野権現事」の本文引用は、『神道大系 文学編一 神道集』（編集者 財団法人神道大系編纂会、校注者 岡見正雄 高橋喜一、発行所 財団法人神道大系編纂会、一九八八年二月二十九日）による。

(10) 各場面の本文引用は『新編日本古典文学全集六十三 室

町物語草子集』(校注・訳者 大島建彦 渡浩一、発行 小学館、二〇〇二年九月二十日)による。

(11) 『法華経』「卷八第二十五 観世音菩薩普門品」(『法華経(下)』(訳注者 坂本幸男 岩本裕、発行 岩波書店、一九六七年十二月十六日)によれば、仏・辟支仏・声聞・梵王・帝釈・自在天・大自在天・天大將軍・毘沙門・小王・長者・居士・宰官・婆羅門・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・長者婦女・居士婦女・宰官婦女・婆羅門婦女・童男・童女・天・竜・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅迦・執金剛の三十三の姿に変化するという。

(12) 『熊野の本地』においては五衰殿女御が観世音菩薩に祈願したことによって王子は獣から守られると語られている。それに対して『神道集』に収載される「熊野権現事」では観世音菩薩に祈願としてではなく、王子が特別な人間であるがゆえに観世音菩薩が守護しているであろうと語られている。そのため、五衰殿女御が得た観世音菩薩信仰の利益とは言い難いため、×とした。

(おがわ みちよ／本学大学院生)